

2023. 8. 7

TOYOBO
Beyond Horizons

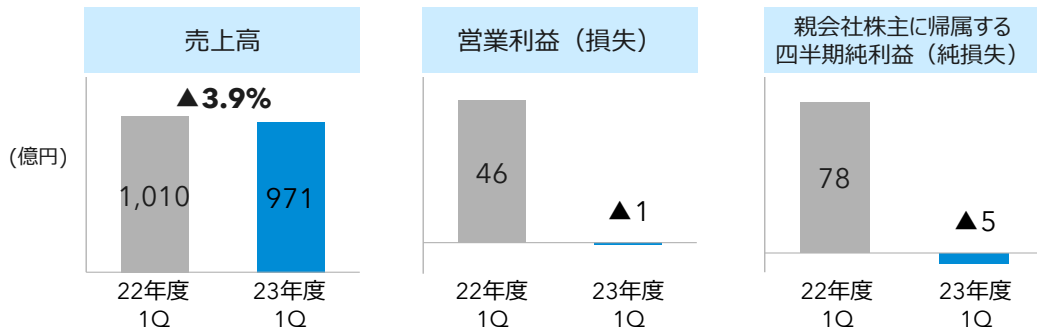
2023年度 第1四半期 決算説明

東洋紡株式会社

皆さん、こんにちは。大槻でございます。本日はご参加いただきまして、誠にありがとうございます。早速ですが、2023年度第1四半期の決算説明をさせていただきます。よろしくお願いいたします。

第1四半期実績

液晶偏光子保護フィルムは販売を伸ばすも、PCR検査用試薬の販売減少に加えて、包装用フィルムの需要回復が鈍く、減収減益。四半期純損失は5億円



2024年3月期 通期予想

フィルムや自動車関連の数量回復、および交易条件の改善により、営業利益 150 億円、当期純利益 40 億円の予想を据え置く

まず、決算のポイントです。

当四半期は、厳しい決算でございました。

液晶偏光子保護フィルムは、販売を伸ばしております。ただ、PCR検査用試薬の販売は、新型コロナウイルス感染症がピークアウトし、販売が減少しました。また、包装用フィルムの需要回復は想定よりもペースが鈍く、当初の予定よりも遅れており、減収減益の要素となりました。

加えて、原燃料の減益要因もございました。市況価格がピークの時に調達しました分のコストが、2023年度1Qの原価に入ってきております。

結果といたしまして、下のグラフに書いておりますが、営業利益は▲1億円となりました。また、2022年度1Qはビルの売却益や火災の受取保険金が特別利益にございましたが、それが今期はありませんので、結果として最終利益は、当期純損失の5億円となりました。

なお、営業利益が四半期決算でマイナスとなりますのは、リーマン・ショックの直後の2008年度4Qに営業損失15億弱の実績がございました。次の2009年1Qでも、7億円強の営業損失を計上しており、このとき以来約14年ぶりの四

半期決算での営業損失となりました。

通期予想でございますが、フィルム、それから自動車関連の数量は、少しずつですが、既に回復基調に入っております。特に、後ほど申し上げます“コスモシャインSRF”などは順調に回復基調となってきました。加えて、交易条件の改善については、原燃料コストの反映がピークアウトしてまいりますので、徐々にプラスに転じていくということもございます。製品価格への転嫁の努力を続けており、それなりの成果が出てきております。

そういったことを勘案いたしまして、通期の営業利益150億円、当期純利益40億円という予想は据え置かせていただきます。

決算サマリー | PL

TOYOBO

(億円)

	22年度 1Q	23年度 1Q	増減	
			金額	率
売上高	1,010	971	▲ 40	▲ 3.9%
営業利益	46	▲ 1	▲ 47	-
(率)	4.6%	▲ 0.1%	-	-
経常利益	43	▲ 3	▲ 46	-
特別利益	68	0	▲ 68	-
特別損失	3	5	+3	-
親会社株主に帰属する四半期純利益	78	▲ 5	▲ 83	-
EBITDA* <small>* 営業利益 + 減価償却費 (のれんを含む)</small>	95	44	▲ 50	▲ 53.2%
EPS (円)	87.7	▲ 5.8	-	-
減価償却費	48	45	▲ 3	▲ 6.8%
設備投資	90	108	+18	+20.0%
研究開発費	37	34	▲ 2	▲ 6.8%

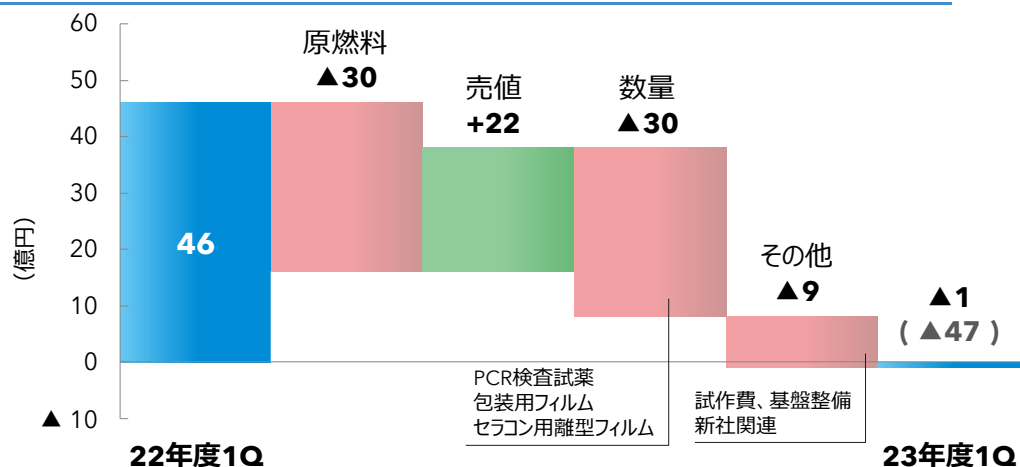
3

決算のサマリー、PLです。

営業利益が▲1億円で、2022年度1Q比較で約47億円の減益でございます。それから、特別利益に昨年度は68億円を計上しておりますが、今年度はございませんので、この部分がマイナスということで、当期純損失5億円を計上しております。また、減価償却費が減少しております。先行投資を続けておりますが、2022年度末に実施いたしました減損処理に伴い固定資産が減少したためであり、設備投資のペースは落としておりませんし、予定どおりの数字で推移しているとご理解いただければと思います。

営業利益の増減要因

TOYOBO



	21年度		22年度				23年度
	3Q	4Q	1Q	2Q	3Q	4Q	1Q
為替レート (円/US\$)	114	116	130	138	141	132	137
国産ナフサ (千円/kl)	61	66	86	81	72	67	67
	63		84		70		-

4

営業利益の増減要因を整理しております。2022年度1Qに比べ約47億円の減益要因を、グラフで表現しております。

まず、原燃料▲30億円のうち、原料部分が約10億円、燃料部分が残りの約20億円と試算しております。

その考え方ですが、グラフ下に国産ナフサ価格の推移を示しております。今回は2022年度1Qと2023年度1Qの比較となります。2022年度1Qの原価に用いるのは、2021年度3Q・4Qの、まだ価格が低い時点での国産ナフサで、平均約63,000円/klベースでの原価となり、2022年度1Qに半年ぐらいのずれ込みで入ってきております。2023年度1Qは、2022年度3Q・4Qの国産ナフサ価格の平均約70,000円/klベースでの原価になります。この差額約6,000円/klが、1Q比較で減益に作用したということになります。当社の場合、国産ナフサ価格が1,000円/kl違いますと、年間で約5億円の差が出ますので、計算していただきますと8~10億円が、昨年1Qと比べて、この1Qで原料部分の減益要因となったということです。

残りの燃料部分につきましては、さらに傾向が著しいのですが、石炭の市況価格が、2022年度から急に高騰しました。その部分とタイムラグを勘案いた

しまして、燃料影響として約20億円がこの1Qでは減益要因になったところ
でございます。石炭価格はかなりピークアウトしていますので、今後2Q、
3Qと原価は下がっていきますが、自家発電設備に使用していますので、か
なり先行した調達をしております。ですので、実際にコストメリットとし
て効いてくるのは、2023年度後半になってくると今のところ考えておりま
す。

この原燃料の▲30億円を必死に売値に転嫁すべくカバーして、売値因とし
て+22億円という効果が出ております。単純に割り返していただきますと、
売値への転嫁率は約73%となります。この売値22億円は何で実現したかです
が、包装用フィルムは、原料コスト高の部分につきましては、ほぼ売値に
転嫁ができています。ただし、燃料部分につきましては、なかなか
お客さまとの話し合いで転嫁に苦しんでいるということで、今も部分的に
転嫁を続けております。もう少し値上げの余地はあろうかと思っておりますもの
の、なかなか厳しい状況かなとも思っております。

工業用フィルムにつきましては、相当値上げをしてきていますが、まだ原
料部分、燃料部分のカバーには至っておりませんで、不十分です。引き続
き値上げの努力を続けております。

続いて、数量要因が▲30億円ですが、このうち約3分の1は、PCR検査用試
薬のピークアウトが影響してございます。それと、想定以上に包装用フィ
ルムの数量の在庫調整が起きており、なかなか回復しない部分も影響して
おります。“コスモシャインSRF”は堅調ですが、セラコン用離型フィルムは、
まだ主要なお客さまでの在庫調整が続いており、回復はおそらく2023年度
下期になるだろうという見立ては変わっておりませんので、この辺りが要
因となって、▲30億円になりました。

その他としては、仕込みの費用、試作費などで▲9億円でございます。2023
年4月に三菱商事さんとのジョイントベンチャーをスタートさせており、新
しい会社をつくるために必要なコストが減益要因として出ています。以上
により、トータルで▲1億円となります。

原燃料価格は、徐々にピークアウトしているということで、原価のタイム
ラグを勘案しても、2023年度下期にかけては増益に効いてくるだろうと想
定しております。後ほど、通年予想のところで説明申し上げます。

決算サマリー | BS

TOYOBO

	(B)		(A)	(億円)
	22/3末	23/3末	23/6末	増減(A)-(B)
総資産	5,178	5,889	5,695	▲ 194
現預金	272	607	307	▲ 301
棚卸資産	960	1,219	1,252	+33
有形固定資産	2,276	2,402	2,476	+74
純資産	1,971	2,214	2,199	▲ 15
自己資本	1,949	1,896	1,887	▲ 9
うち利益剰余金	747	705	664	▲ 40
非支配株主持分	23	318	312	▲ 6
有利子負債	1,912	2,294	2,214	▲ 80
D/E レシオ	0.98	1.21	1.17	-
Net Debt / EBITDA倍率*	3.4	5.8	10.8	-

* (有利子負債 - 現預金) <期末> / EBITDA <年換算>

5

決算サマリー、BSです。

現預金のところで少々でこぼこが出ております。2023年3月末で607億円の現預金を残しましたが、2023年6月末では307億円で、当社の場合、大体、連結財務諸表上の現預金は300億円前後を残すことを通常の水準にしております。2023年3月末は、三菱商事様とのジョイントベンチャーの設立にあたって、三菱商事様からの資本金の払い込み約300億円が、3月末に払い込まれました。その部分が現預金に残っていましたが、通常レベルに戻しましたので、増減としては約300億円減ることとなりました。

D/Eレシオは、2023年6月末で1.17でございました。有利子負債が2,214億円で80億円の減少ですが、先ほど申しました現預金300億円を取り崩す形になりましたので、これを入れての減少でございます。先行投資も続けておりますので、借入金は、実態としては増えているとご覧いただいても間違いではございません。

一番下のNet Debt/EBITDA倍率は、損益が落ち込み、EBITDAが減価償却費しか出なかったため、10.8倍でございますが、これは瞬間的な最悪レベルと認識しております。

決算サマリー | セグメント別

TOYOBO

(億円)

	売上高		営業利益		
	22年度 1Q	23年度 1Q	22年度 1Q	23年度 1Q	増減
フィルム	392	390	25	12	▲ 12
ライフサイエンス	87	81	21	14	▲ 8
環境・機能材	279	250	9	▲ 7	▲ 16
機能繊維・商事	222	222	▲ 4	▲ 7	▲ 3
不動産・その他	31	28	3	4	+1
消去・全社	-	-	▲ 9	▲ 17	▲ 8
合計	1,010	971	46	▲ 1	▲ 47

6

決算サマリー、セグメント別です。

後ほど説明申し上げますが、営業利益がYOYで大きく落ちておりますのが、フィルム、環境・機能材でございます。環境・機能材は、新しく発足いたしました東洋紡エムシー、三菱商事様とのジョイントベンチャーを中心とするセグメントでございます。ライフサイエンスは、PCR検査用試薬のピークアウトで落ちてきております。

セグメント別情報

TOYOBO

売上高	22年度					23年度
	1Q	2Q*	3Q*	4Q*	通期*	1Q
フィルム	392	352	356	361	1,461	390
ライフサイエンス	87	106	100	88	381	81
環境・機能材	279	278	267	283	1,108	250
機能繊維・商事	222	232	223	248	924	222
不動産・その他	31	33	30	32	126	28
消去・全社	-	-	-	-	-	-
合計	1,010	1,001	976	1,012	3,999	971

営業利益	22年度					23年度
	1Q	2Q*	3Q*	4Q*	通期*	1Q
フィルム	25	▲ 0	▲ 4	▲ 4	16	12
ライフサイエンス	21	33	26	12	92	14
環境・機能材	9	12	8	11	40	▲ 7
機能繊維・商事	▲ 4	▲ 7	▲ 7	▲ 7	▲ 25	▲ 7
不動産・その他	3	6	7	5	22	4
消去・全社	▲ 9	▲ 11	▲ 13	▲ 13	▲ 45	▲ 17
合計	46	33	17	5	101	▲ 1

*新セグメントでの22年度 2Q～4Qおよび通期実績は、監査前の暫定値です。今後、変更になる可能性があります。

7

セグメント別の四半期営業利益の推移でございます。1QYOYで比較いたしますと、営業利益を大きく落としておりますが、昨年度の2Q・3Q・4Qも整理して表示させていただきました。新しいセグメントに組み替えた後の昨年度の数字とご理解いただきたいと思います。

これを見ていただきますと、営業利益のところ、1QYOYでは大きく落ち込んでいるのですが、3Q・4Qと比べていただきますと、フィルムは既にピークアウトし、回復基調に入ってきているとお分かりいただけると思います。ライフサイエンスにつきましても、昨年の3Q辺りまでは新型コロナウイルス感染症の第7波、第8波辺りがピークでしたために、ライフサイエンスは非常に良い数字で推移しておりましたが、4Q辺りから一気になくなってまいりましたので、QOQで比べていただきますと、ほぼ横ばい、微増益になってきております。環境・機能材は、残念ながら新社スタートに伴うイニシャルコストなどもございまして、損益が落ちているとご覧いただけたと思います。今後回復を期してまいります。

	22年度	23年度	増減	
	1Q	1Q	金額	率
売上高	392	390	▲ 2	▲0.4%
営業利益	25	12	▲ 12	▲49.7%
(率)	6.3%	3.2%	-	-

(億円)

包装用フィルム

- 原燃料価格高騰に対する製品価格の改定が進むも、流通在庫の調整継続により荷動きが低調

工業用フィルム

- 液晶偏光子保護フィルム“コスモシャインSRF”は、販売が大幅に増加
- セラミックコンデンサ用離型フィルムは、サプライチェーン全体での在庫調整が継続し苦戦

8

それでは、セグメント別の情報でございませす。まず、フィルムです。

昨年度の1Qと比べますと、売上高▲2億円、営業利益▲12億円です。ただ、直近の4Qと比べると、売上高+29億円、営業利益+16億円ということで、少しずつですが、回復に入っています。

包装用フィルムは、原燃料価格高騰に対する価格改定をかなり進めましたが、残念ながら量が出ておりませんで、特に2022年度下期からの流通在庫の調整が2023年度1Qにも続きました。ただ、食品包装用途などを中心とした必需品でして、特に今シェアを落としているというものではございません。今のところ、これぐらいの時期から、この商材については間違いなくここまで回復、というのがなかなか見通せない時期ではありますが、おおむね下半期からは回復傾向に入ると見ております。

工業用フィルムは、“コスモシャインSRF”は堅調です。テレビ台数そのものはそれほど大きく増えておりませんが、液晶テレビの大型化が進んでいることと、偏光板メーカーに対する、“コスモシャインSRF”のシェアが相対的に増えていることが、主な要因です。一方、セラミックコンデンサ用離型フィルムは、在庫調整が想定よりも長引いております。在庫調整はほぼ底を打っ

たと見ておりました、直前2022年度4Qに比べますと既に増収に転じております。もともとセラコン市場は、中期的に見ますと年率7%の成長事業ですし、在庫の調整、回復を待っている状況ですので、量が回復し始めると、業績の回復も比較的目に見えて速くなるのではないかと今思っております。

	22年度	23年度	増減	
	1Q	1Q	金額	率
売上高	87	81	▲5	▲6.3%
営業利益	21	14	▲8	▲36.6%
(率)	24.6%	16.6%	-	-

(億円)

バイオ

- 新型コロナウイルス感染症の5類感染症移行に伴い、PCR検査用試薬の販売は大幅に減少
- 診断薬用原料酵素は、国内外ともに堅調

メディカル

- 人工腎臓用中空糸膜の販売が堅調

医薬

- 医薬品製造受託はFDA対応の費用発生が継続
※FDAより、Warning Letter解除に関する文書を受領（2023年7月5日付）

9

次はライフサイエンスです。

ライフサイエンスは、ここに書いてあるとおり、新型コロナウイルス感染症が5類感染症へ移行しましたので、PCR検査用試薬の販売が大幅に減少いたしました。YOYで売上高は▲5億円、営業利益は▲8億円となっておりますが、この8億円は、ほぼPCR検査用試薬の減益に等しい数字です。これも直近の4Qと比べますと営業利益は+1億円で、回復基調に入っております。PCR検査用試薬は落ちていますが、診断薬用の原料酵素は、国内外ともに堅調でございまして、バイオ事業を支えているというのが現状です。

メディカルにつきましては、人工腎臓用中空糸膜の販売が堅調に推移しておりまして、想定よりも少しプラスに振れています。ニプロ様との敷地内に一貫工場を建てる計画を発表させていただいておりますが、2024年7月の稼働開始に向けて順調に建設が進んでいる状況です。

医薬につきましては、FDA対応のWarning Letterを頂戴し、その対応に注力してきておりましたが、なんとかこの7月に解除の文書を受領いたしました。これまで、このFDA対応の費用をかけてきておりますが、今後も若干費用が続きますので、損益の絶対レベルとしてはまだ苦しい状況です。しかし、少

しずつコスト負担は減っていき、通年で見ますと、このセグメントも間違いなく今後回復すると思っております。

	22年度	23年度	増減 (億円)	
	1Q	1Q	金額	率
売上高	279	250	▲ 29	▲ 10.5%
営業利益	9	▲ 7	▲ 16	-
(率)	3.3%	-	-	-

樹脂・ケミカル

- エンジニアリングプラスチックは、国内において製品価格の改定が進捗し、収益性が改善
- 工業用接着剤“バイロン”は、中国をはじめアジア向けの販売が減少
- 水現像型感光性印刷版用途の光機能材料は、北米、中国向けの販売が低調

環境・ファイバー

- 環境ソリューションは、LIBS*製造工程で使用されるVOC回収装置の出荷時期のずれにより販売が減少
- 高機能ファイバーは、“ツヌーガ”は耐切創手袋、“ザイロン”は建築補強用途の販売が減少
- 不織布マテリアルは、土木・建材などでの需要減の影響を受け不調

*リチウムイオン電池セパレータ 10

環境・機能材です。

昨年度の1Qと比べていただくと、16億円の営業利益の減益です。直近の4Qと比べましても、18億円の減益ということで、急に悪くなったのかという数字に見えるのですが、実際、悪くなっている部分がある一方で、テクニカルな要因で収益が打たれている部分もございます。

まず樹脂・ケミカルのエンプラにつきましては、国内において製品価格の改定が進捗し、収益性が改善したことで、かなり回復基調に入っております。ただ、“バイロン”は、中国をはじめアジア向けの販売が減少し、また水現像用の光機能材料は、北米や中国向けの販売が低調になってきており、自動車関連市場の影響や原燃料高の影響も相まって、樹脂・ケミカル全体としては、直近の4Qとの比較ではエンプラのプラスを打ち消すような形となりました。

環境・ファイバーですが、環境ソリューションのVOC回収装置は好調ですが、個別の案件ビジネスでございますので、2022年度1Qや4Qと比べますと、2023年度1Qは出荷時期のずれが影響し、数量が減少いたしました。高機能ファイバーは、基調としてはあまり悪くはないのですが、“ツヌーガ”は耐切創用手袋、“ザイロン”は建築補強材用途が減少したということで、減益でござ

耐切創用手袋、“ザイロン”は建築補強材用途が減少したということで、減益でございました。不織布マテリアルは、土木・建材などの需要減により、今、非常に苦戦しております。加えて、原燃料価格の転嫁にも苦戦し、減益となりました。

このセグメント全体で自動車関連の用途が売上高の多くを占めております。今後の見通しとしましては、この辺りが少しずつ回復してまいりますので、通年で見たときにはなんとか期初の営業利益目標を達成できるように、三菱商事様を含めて今、努力の余地を探っている状況でございます。

	22年度	23年度	増減	
	1Q	1Q	金額	率
売上高	222	222	▲ 0	▲ 0.1%
営業利益	▲ 4	▲ 7	▲ 3	-
(率)	-	-	-	-

(億円)

衣料繊維

- 不採算商材からの撤退と、製品価格の改定を進めたことにより、収益が改善

エアバッグ用基布

- 自動車生産台数の回復に伴い販売量が増加
原料購入価格の上昇に対し、製品価格の改定を進めるも、収益性の改善には至らず

11

機能繊維・商事です。

これはエアバッグ用基布と衣料繊維という、課題事業のセグメントということで、中期経営計画のポートフォリオの改善の方針に従って、はっきりとこういう位置づけのセグメントで回復を期していくと区分してございます。

衣料繊維につきましては、不採算商材からの撤退を進めておりまして、価格の改定も含めて収益を少しずつ改善させておりますが、残念ながら2023年度1Qを区切りますと、まだ少し赤字が残ったということです。ただ、通年では間違いなく黒字に転じていくということで、回復すると思っております。

エアバッグ用基布でございますが、2023年度1Qでは、購入原材料のピーク時の市況価格が、まだ原価に入ってきておりますので、残念ながら、製品価格の改定は進めてきておりますが、まだ収益的には改善には至っていないというのが現状です。

2023年度 業績見通し

TOYOBO

フィルムや自動車関連の数量回復、および交易条件の改善により、
営業利益 150 億円、当期純利益 40 億円の予想を据え置く

(億円)

	22年度	23年度	増減	
	実績	見通し	金額	率
売上高	3,999	4,300	+301	+7.5%
営業利益	101	150	+49	+49.1%
(率)	2.5%	3.5%	-	-
経常利益	66	110	+44	+66.9%
特別損益	▲ 60	▲ 20	-	-
親会社株主に帰属する当期純利益	▲ 7	40	+47	-
EBITDA	291	360	+69	+23.7%
EPS (円)	▲ 7.4	45.0	-	-
減価償却費	190	210	+20	+10.2%
設備投資	427	500	+73	+17.0%
研究開発費	141	160	+19	+13.4%

12

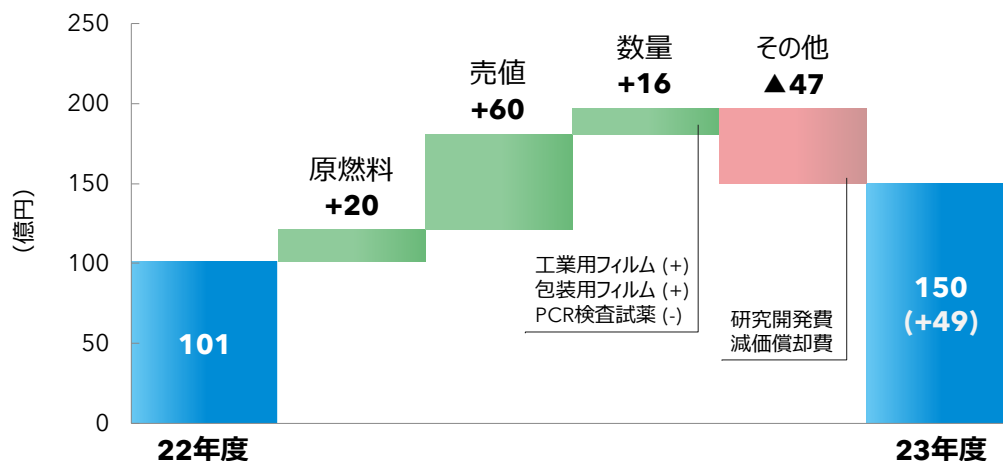
最後に、通期の見通しです。

冒頭に説明申し上げたとおり、当初の予定を変更しておりません。

1点、減価償却費の部分でございますが、当初217億円としておりましたが、フィルム機台の償却開始が少し遅れますので、217億円を210億円に変更させていただきます。他は変えずに、このままで頑張りたいと思っております。

営業利益の増減要因

TOYOBO



	22年度	23年度
為替レート (円/US\$)	135	138
国産ナフサ (千円/kl)	77	61

13

総合いたしまして、営業利益の増減要因です。

今年度、営業利益150億円をどう実現していくかですが、原燃料+20億円としてございます。内訳といたしましては、原料の増益要因が約60億円生じてくるだろうと考えております。ただし、石炭を中心とする、冒頭で説明申し上げたロジックで、燃料については長い間の先行手当をしておりますので、ピークアウトの効果が出る時期は原料よりは少し遅れるということで、約40億円の減益要因が残ると計算しております。原料要因+60億円、燃料要因▲40億円で、原燃料+20億円という形になるだろうと予想しております。

売値の+60億円ですが、2023年度1Qで約73%の売値転嫁を進めてきたことに加えて、2Q以降に売値の改定ができる商材、今後実現していく商材が加わってまいります。売値をきちんと維持し、また上げていく努力を進め、+60億円出てくるのではないかと見ております。

数量要因がなかなか読みづらいところではあるのですが、工業用フィルムは、“コスモシャインSRF”で既に出てきておりますが、セラコン用離型フィルムの回復を見込み、包装用フィルムもそろそろ在庫調整が終了するということを見通し、増益に持っていきけるのではないかと考えております。

PCR検査用試薬は、若干ピークアウトで、大きく落とす部分が出てきておりますが、総合して数量因は+16億円は出てくるだろうと思ってございます。

その他につきましては、2023年5月時点では▲54億円と見ておりましたが、コスト圧縮などを進めまして、▲47億円にとどめられるのではないかと考えております。減価償却費が減ったと先ほど申しました分も、ここに入ってきております。

ということで、営業利益150億円を必達目標としてなんとかやっていけるのではないかとというのが現時点での見立てでございます。

セグメント別見通し

TOYOBO

(億円)

	売上高		営業利益			直近予想 (23/5)
	22年度 実績*	23年度 見通し	22年度 実績*	23年度 見通し	増減	
フィルム	1,461	1,670	16	88	+72	88
ライフサイエンス	381	350	92	52	▲40	52
環境・機能材	1,108	1,350	40	58	+18	58
機能繊維・商事	924	800	▲25	▲15	+10	▲15
不動産・その他	126	130	22	22	+0	22
消去・全社	-	-	▲45	▲55	▲10	▲55
合計	3,999	4,300	101	150	+49	150

*新セグメントでの22年度実績は、監査前の暫定値です。今後、変更になる可能性があります。

14

最後に、セグメント別見通しでございます。

これは今のところ変更なしということで、いかせていただきたいと思います。

私からの説明は以上でございます。ありがとうございます。

補足

**「Morningstar ジェンダー・ダイバーシティ指数（GenDi）」の構成銘柄に初選定
⇒ GPIF が採用する日本株の6つの ESG指数すべての構成銘柄に選定**

- Morningstar ジェンダー・ダイバーシティ指数（GenDi）
- FTSE Blossom Japan Index
- FTSE Blossom Japan Sector Relative Index
- MSCI ジャパン ESG セレクト・リーダーズ指数
- MSCI 日本株女性活躍指数（WIN）
- S&P/JPX カーボン・エフィシエント指数



FTSE Blossom
Japan

2022 CONSTITUENT MSCIジャパン
ESGセレクト・リーダーズ指数



FTSE Blossom
Japan Sector
Relative Index

2022 CONSTITUENT MSCI日本株
女性活躍指数 (WIN)

■子育てサポート企業として「プラチナくるみん」認定を初取得

- ・次世代育成支援対策推進法に基づき、「くるみん」認定を受けた企業の中から育児と仕事の両立支援など、より高い水準で取り組む企業に対して認定

2022 年度 当社実績

- ・男性従業員の育児休業取得率 104.3 %
- ・子の1歳の誕生日に在職している女性従業員の割合 97.8 % 等

**■「2023 アジア太平洋地域気候変動リーダー企業」に初選定**

- ・英フィナンシャル・タイムズと独調査会社スタティスタが共同で実施した調査において、気候変動に対する取り組みの功績が優れている上位 275 社を選定
(アジア太平洋地域の 14 の国と地域に本社を置く企業を対象)
- ・評価を受けた当社の主な取り組み
SBT認定の取得、CDP最高評価の「サプライヤー・エンゲージメント・リーダー」に 2 年連続で選定、など

アナリスト・機関投資家向け 事業説明会（予定）

➤ **環境・機能材事業 8月29日（火）**

後日、当社ホームページ「株主・投資家情報」にて、説明資料を掲載予定

本資料中の見通しや目標等、将来に関する記載事項は、本資料作成時点において入手可能な情報に基づいて作成したものであり、実際の業績等は、今後の種々の要因によって、本資料の記載事項と異なる場合がありますことをご了承ください。

東洋紡株式会社

All Rights Reserved

TOYOBO
Beyond Horizons

© TOYOBO CO., LTD. All rights reserved.